

編集後記

＜白壁 彦夫＞

本号から3回にわたり、sm 癌の典型症例が掲載される。

各科の専門家の率直な意見を、まず、もらうことができた。診断への期待、手術への対応、病理の姿勢が、おわかりになるだろう。

典型症例をみると、圧迫法が、どんなに重要かが、おわかりだろう。質的診断には不可欠なのだ。それも、熟達の手による圧迫像だ。昔、ドイツ人に二重造影像だけみせても信用しなかった。同じ病変の圧迫像を、まずみせて、次に、二重造影像をみせることにしていた。そうすると感心する。良い圧迫像を撮ることができるというのが、X線診断では、一種の資格みたいなものである。

担当の編集委員に十分に吟味してもらった症例ばかりである。たくさん提供例の中から選ばれたものである。せっかく提供して下さったのに無駄骨折りのようなことをさせてしまった諸兄に、御礼申し上げるとともに、深くおわびしたい。

診断の適否は、部位、凹のまわり、凸の奇形的と言えるような形、癌の量によるようだ。これを診断面に、どれだけ生かすことができるか。これが当面の作業だろう。こんな面を整理すると、もう少し診断の進歩を図れそうだ。それにしても、その後に、また、新しい宿題が残りそうだが。

＜編集＞ 早期胃癌研究会